

1. 目的 ヘッケルの提唱したエコロジー論は1870年代にヨーロッパからアメリカへと大いに発展したため、1933年に既にヒューマン・エコロジー論の成立を、東洋思想を基盤とした独自の育ちの思想を創造した。その評価は160年が経ち、現代に於ても、企業、農業、畜産等に具身に生かされて、経営、強力なアプローチとして経済と倫理観の一体観がみられる。今回は90年に経って究明した。

2. 方法

- ① 開びやく観から生れた、ヒューマン・エコロジー論の独自性。
- ② 生活原理における分度(消費計画)と確證-自謙と他謙の分析-心田の開発
- ③ 現代における 暮らしのトータルアプローチとしての考察

3. 結果の考察

尊徳の思想は、最初は儒教の影響からやめて独自に 開びやくによる生成発展のシステムを創造した。そして天地自然と人間及び生物との関係付けを宏大なトータル・アプローチによって諸条件をくみこみ、人間生存の必然的哲理を突発している。その結果生活原理としての他法-方法論として 昇越した分度論、推謙による価値観の確立さか、現代に於て必要となってきた。今回は東西文明を越えた 普遍的な生活原理 価値のつくりへの追究を試みた。